



伊地知文庫
文庫20
77
1



伊地知氏書冊

史運の道

わしは... 詞... 時... あり... なる... こと... け... 者...



あまのついでにふくのうらみよ
百物の五段をわさゆり
馬の根のまゝにふあをせと校
合懐く林風をたてふ
樹刻之とつり海河つり
代つらつりつりつり
風をほくむじつりつり
松の末葉まゝにわさゆり
さつりつりの言元禄十七の
まの月序をたてふ

親明軒清徳住願

伊地紅氏吉冊

愚句老葉第一

春連歌

宗祇

月乃標たれまゝにわたり

かすこふみりらた乃神を

まゝにわたりつりつり

美^目みればなむれ愚存の奥ふ記

ゆきをよむじつりつり

わさつらわさつらつりつり

万物まふらつりつりつり

わさつらわさつらつりつり

これおせりせりつりつり

山の色みつりつりつり

たじつりつりと家よの理文を

かんや

宗長注

萬物乃其此色まらわし
家よみしりかかすふありなる
へん花のまゆと侍しき
花といふえんよい玉出る
かきらとりりりやあや
山しからきくしんじんま
くは余情とこころは一部乃
巻乃まき量らるるや

今日うむくはかきこなる

物家神より山ふま来て

自
天は乙女とらあひし山といは

久く袖當乃あはしりて今

日れあはすまふ袖とて大節乃

曲をいかに結れぬらるる

いし結らひほらとをけるや

天武此所事いしと記ゆる

長

此句此公天武天皇大伴皇太子

母りりきくより好むやよ御

まとの時節會なとこころなれ

天女くより五節舞と養と

そのむしとやいしとあそこ

こころのよ袖あり山とほらるや

若むよありまをむしとあそ

まきめらすはくより天女

袖乃えんぬや

引記も子の袖あり山とまきくそ

りすめれきしりたりなる

三つに柳をらさしは
このまじさなれ川内明とあり

河邊の山一帯はすくなくわひらの
景氣よりわらふとせあるしき
いひしす

吉柳れみまののりはらうく
さかのうらうよまをせうあく

^長梅柳をらうを中記さなれらよ
あまひしとをましとらよ

吉柳まみまのりはらうく
柳とあり奇敷うす

くおやいつい中馬の強

かすうあやまら乃白記せよ

^白後江波よ中馬と織半は今更

何ともあよそのさなり中馬を
うらうらう水はら白記せ

れ公うとやん作し

水れ中よあまらうまぬや
山乃みらとすうらうじん

^長後れ紋り中馬と織半ありあよ

又あやれ後あり中馬れんと
水書公より白記ありあは後の

中馬らうは真下や

あはれ中よのやまらうらう略

花より風いづよとあるん
自 尾上よりさむじ松の一本
一本より吹らるるも花より風の
えぐりしものさむじ松の一本
さむじ松の一本

尾上は松乃喜の系集也

花より風いづよとあるん

自 去年はあつたつとさむじ松

月日はうらやまふさふさ山里人
よかりておりの心なり
いほのまふお集りし人

さむじ松の系集也

長注よ此句なり

のち七日は月乃のわけと

自 白馬と見えし袖乃つてありて

自 南日白馬節會也百官云郷見
けよふと一禁中乃節會のさ
むじ松の一本さむじ松の一本
のちの田舎しは心ゆくんれ又階
そのちのそとをせり

長

け節會年中行事よとあり
七日乃夕月夜物引つてさむじ
松の一本さむじ松の一本
と見えしよとありをせり白馬を

あどるとより清少納言枕
茶紙よもあんとくち

しあんとくち茶紙よもあんとくち
梅ささせ若菜つむ人

自注こぼり

長
け句別乃心あり 若菜つむ人
梅ささせかさせと也

なひこととてさる若柳の陰

あつら川一舟お山雪ききて

自
最の有心やいひゆらんお山此

雪の雨節此氣氣明もる依保

此川原乃数水也

長注およけ句なり

長
木ささおとりにあむとて

去るぬ谷と氷やあむらん

あつらあ川氷とさる

雪うつし深谷乃小川雪寒く

自
只深谷乃さあすしあつら

氷ときらりとあひえらる也 長剛

よて去のあくとあつらあ川

便本句のあつらあ川

長

氷れららるとあつら深谷乃余を

あつらあ川とあつらあ川

あつらあ川とあつらあ川

付録

長

うきうきとつとつ年取く
長しせうと云れ下店

日のせつしよ 馬うな

山よりしんじりたの雪

山より記能く云とてりぬ

一日のせつしよとてりぬ

およ心とてりぬ

長

およ心とてりぬ

つとつとつとつ一筆

つとつとつとつとつとつ

自
今一筆のつとつとつとつ

つとつとつとつとつとつ

つとつとつとつとつとつ

つとつとつとつとつとつ

つとつとつとつとつとつ

つとつとつとつとつとつ

つとつとつとつとつとつ

長

つとつとつとつとつとつ

つとつとつとつとつとつ

つとつとつとつとつとつ

つとつとつとつとつとつ

つとつとつとつとつとつ

一筆

つとつとつとつとつとつ

つとつとつとつとつとつ

上

け平れやうげとうふらや

むく東れ山もすむ

雪清い何う白根れいあん

長

甲北及れ白根とたふさる縁乃

くゆきんかといひくぬ根れ

雨よ精粉同とつとらふさ

みや詞乃あきくさうさ

再とくくいむくくらめ

景いさかき何者れ

新ふき里小野乃雪清く

竹の心くいさく人む

云しれ山大半めく作して

き里小野れ雪清てきく

たんや

何者乃きき里小野れ

中なる

秋てりきさうさ

梅ふら花れ在り月

残りとい月乃きさうさ

らじいさくきさうさ

秋の月なる

老れら栽し暮木れ梅咲て

よこせれその中てあじき

月おとさき梅あけの袖

^目横電れをて押ししと様あり

そよ梅くい誰とさひゆん

^也梅あけの袖乃月と押じや雪と

しらすそ月いたのさきこの公儀

くそみぬかの月と梅は眞真なり

梅は花あけいさうと袖の上よ

新から月乃のさきありあけ

け押しけしあや

くらあつたさきとくを山れん

^自梅の香よ起出る長月落て

松よりさおわくさしせは残

月一色よきさあひさんとく

もや流さつさ公いゆん

^長花とくすいしを月落て梅乃

かのなる香あや

いふれよりやまあやあ梅乃花

色してはそ総のやいさく

心や花さるあまあきん

くまへ人いむしれ宿乃梅

^自花よあさりー古人れ公と帯ひ

ちては句いさうをさるちんし

例しと力あむむはいむしよあ

人こそあけ色をれよ乃月

いあふむしととちま乃月

こころあけ袖よりあきん

^{長川寺同}梅屋ー人れ花公さる

梅うらりりり雪と花

山はれ川を以柳風吹く

白 乞はあつらひれ才三よ月待共

白柳と穿し竹やん才三よハ

いさゝ志有とと

河邊乃梅柳かふく

家つ心門とや駒はさびん

去草より色も柳乃陰

白 去れ約乃心より一但念あ草

よ心也

長 口へくらのと海や

長 心よりあつらひす惠はちう地と

本此下草乃 来れ去く也

雪はりてさきよ 白く山はる

白柳れ衣より衣を物とさく

白 乞は才三よははらうまつり

白柳乃衣を衣を河れ也身也

一くふくあまの乞は記はる也

此句才三めく竹一白柳乃衣を

衣を河れをせしけ有て足ゆ

よりひらよ去れ心やうさるん

白 衣柳れ花よ 萬うなく

白 清サ紀さつりい言は花よ

柳れ花乃何しうらるるすは鳴

そとさるゆし 秋はうさるるは

長 川はれは花よ木つよ言は

梅とさるく 柳くさるはぬ

雪の花よ宿せぬおとりの枕を
紙よと花の袂にほろろと
むら花よ来りてまに袂に
家秘のいさ乃半也

花よ秋の月を指さるるはく

くはく月よ雪うた

花言乃雨の足さるる事

長注用

おのよとておの花とらん

山をれとておの月をらん

自
出木やとておの花乃雨の事

とておの花をらん

句なり

心とておの事

長
五たふとておの事

古の月日とておの事

自
花とておの事

花かき里よはかた

弄とておの事

やとておの事

乃とておの事

61
ちとておの事

長
二年とておの事

梅とておの事

長
朽木とておの事

け三向とておの事

じとておの事

自
うし世を花にまかせて独り
花に知中を知らずおぼえて心
そよそいふれ也

長
花にまかせ中を知らずおぼえて心
そよそいふれ也

去年より人へまされ花よ来

わづらひしうなれまこひ

又やこころ花にまかせ

自
ふれしは心志程あさくやゆこ

長
け二句世乃中のまへ眼あめや

力なつてはあつた何よあま

花よふれ若乃はひりて本

自
世は皆花乃ましくお力一乃若

れ裡本まよあすのうれゆ

心や弄は不及川

いふ人よりおれまこ

かりしぬ方や若れ裡本

長
若乃裡本れ花よあま

力よそそくゆらう

いふ人よりおれま

なくまじわれ夢をやん

自
時とあそぶ花よ山下

自
又文字を山を恨む心

人れ情う恋とたりあ

自
折枝よまよ山まれ花

自
是より行かぬ花也月雪

折るせて分てえは恋とつ
やういそりな〜が〜是うら
と恋と成わるといれのを
長
は二句をゆるめ

友なき山乃ららるるな

大いれそ人よせい花はりし

自
深山幽谷へ分入公うと花よく

いふけゆるえまやまゆるをじ

長
深山幽谷乃ららるるに分入ゆる

いふけゆる乃花よく人せいま恨

かり〜とや

夜す〜とむ有ぬ乃月

鳥のう花はらひよ山をく

自
花よ鳥乃をすゆるむ有はれは

乃山海やひし中りゆ〜とや

長
花鳥乃声白ひよあゆるん山海

れわつき月よふそ誰とそゆるん

〜とら〜とそあかりなり

山守といふは〜と花よ来て

自
花よ笑〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と〜と〜と

ゆり〜と〜と〜と〜と〜と〜と

長
花よ〜と〜と〜と〜と〜と〜と

い〜と〜と〜と〜と〜と〜と

家よ〜と〜と〜と〜と〜と〜と

お〜と〜と〜と〜と〜と〜と

山守といふは〜と〜と〜と〜と

自
句〜と〜と〜と〜と〜と〜と

長

七月くつひくし中をぬき梅
さしめや思葉をちかき

山よりいづいもむじき砂を
尾よれさうりやうくかき

中をさしめり志賀れ山を
うり野ならさしめ花をいづり

花を吉野やあやし二も志賀
れ山ぬき花をれ便よやひや
心なり

長

花を吉野やありさし志賀れ
山をぬき吉野をいづりさし
中ら心なり志賀よ花をれ山に也

いづりさしめりさしめ本なり
年くれ花よ志賀し吉野山

自

年く歳く花よの入ゆと今
いと陰道れ心すれとさうさ
宵しゆん

長

花見よれとわしく行く陰道
の心なりとさうさ

世よすあはうさしとまられり
岩れをさうらもさうさ

又さしゆんもさうさ
花見よれと白雲をさうさん

自

花見山踏ぬれ暑きうぬなり
花見の心なりとさうさ
花見よれとさうさ

花見よれとさうさ
花見よれとさうさ

91

自 式本守清乃とていふに

ひびくはばい志望の長

長 花こそこの世をわきまに

あきらむるは花の稀

とれはとりむま乃古

いかなるやまは花を

ひびく人れをさうし

都よりらく公をな

自 名もきぬ花の中よ

と教乃のわらとを

あきらよまとや

いかりは公うし

そとま言乃う

長 花こそこの世を

あきらむるは

自 前句大事とて

一花のいとやす

そとま言乃

長 花こそこの世を

あきらむるは

花のいとやす

あきらむるは

花のいとやす

自 前句大事とて

一花のいとやす

あきらむるは

いひ相まや

長 遠村をしの花のまゝかたへ

雪とらぬぬ花のまゝ也

山さくらよのりぬぬまゝ也

自 花れぬよさぬ乃雪つれぬもは

雪にさぬ景氣もやかりぬむ

去 花の乃雪とらぬぬ乃まゝ也

ゆきふ花れ光い明くも景氣も

おなすむむむむむむむむ

自 誰に花より遠乃葉乃花

思意よいゆゆゆゆゆゆゆ

外より葉をさらすむむむむ

りよのこゆゆゆゆゆゆゆ

ゆきいまもさすいぬ景氣も

訪人なり何人れをぬいぬ

長 花より花をさらすむむむ

さらすむむむむむむむむ

夕夕無音をさらすむむむ

なんまぬぬ人ぬ又ぬぬ有

打泳りぬといひぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ゆ

長 ちろろよ色とまゝさす

さらすむむむむむむむむ

くぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ふゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

角 ちろろよ色とまゝさす

いつくさてもおの星き

待押む花はやくしる方い古く

自 去毎よ押しこめいつくさあ

くすすそ落るあらしき身上馬の

あし似ゆるとかなはあらしんか

かゝるしと也

うつよなむいそりまうし

このまゝし方いより花又咲て

めらこあらしそ世もまた乃末

自 花のまゝ花よまゝ乃一より

一葉一花只昨日身若恩厚

して千年とあらしそうとて限い

長 なるんや

け前句いひをぬ向も花の葉

花誰のまゝいれくゝもなき

とくさる一盛いめくもれすや

うら葉花よ末まゝいれん

侍ん只昨日花乃一よりそと

世中を親くゝらあや近きく知と

命れうらやあらしり乃山

自 老あらしり夢いそつとき花は

先のなまゝこれ有垣あしお下

とくさるしとかなはあらしんか

浅芽原老木れ花よあはて

自 古心おし老木乃花れ花をい

とくさるしとかなはあらしんか

かくさあらしりはせやうり

古心いせ老木れ花よ松乃風

自
うらな人し沉思し悔つ思ふもや
あひ悔つじ一年は秋合の前句也
長
是し一年連平合の前句也何程
あは沉思とあゆみたること思ふ
筆よはくくかきききききき
これあは思ふききききき

139
契れ未とこのむんふと
花やう老よとらとおあん
自
家いさうかく又と去とれむか
あを花いさうの老と見ゆ也
さてけ句とあんとさういゆ也
北
家いさうかくほの去と契れい今
えの老ととたをと去老よとらとや
又いつとむねうらさうけはあく

143
自
今ハ夕花のやうせ
自
五集限乃急なり公の也 無別
下句さすことりい怪りて 出よ
作らる地とを守ゆ
長
十四字乃内よやうよとりを
いふ忘る風情りうと下句
む大切なりとと

自
里いあきて花のむらり白あ花よ
自
四徳れ花う人の袖夢ひ中
右乃花う袖乃あをふを
さしめや
心わをさす 花うあう
人並よ花うくくは草れ店
上十九

自
心し向しおそくまはし侍らざりし
花とみらる人さきく公くかろく
花とのこころ人と有心のこころや

そつしむる世といふす世に
花とみらる人さきく公くかろく

自
去妹れまはるるあきりし
うとせれおとありけし山居れ
名跡志くく又あれはといはれ
そつしむる世といふす世に

自
別れ戸よ白じ花いよあつた
なめてくられうとありけし
別れの戸よ白じ花いよあつた

露とつらうる石の下
こころとみらる人さきく公くかろく

自
幽谷夕陽よ公とつた
鳥乃き花よさきく公くかろく
よと用方の谷れ下る公とつた
氣味深くむね

自
夕下言あつた花の風さく
西とくもさきく公くかろく
うらりけし世に
うらりけし世に

自
おちりす人さきく公くかろく
あつた花よさきく公くかろく
あつた花よさきく公くかろく

尾上のまはし梅らに

自
け心は花はよゆしつゝ古乃物家
かりとくく又いつのけ花を足印
一紙かとおもふ也 里とあはれ
尾上乃まれとのつゝけりし
むしかりたりと云付也

長注 赤雲流し尾上のまあり

業此産とさひとてやゆらん

志ありて花は夕暮乃ま

自
うねを山位の中さなまきか

あ夕れまをへ入る白くさる也

長
らそめふまゝ人いふくおま

志ありて花乃まをえんあ

れとつた人とおりす也

きんじつに花さる也

花と風いつらりしなめん

いつらりか記や色よ物ん

あそそくその世を花乃恨く

自
せいつらのものを花のあ物

時を忘らうつらに誠恨たあ

長
紙乃ありせよ花のあそく時

つれをうしひらなりくさる

花とつひ出たり

うれ世とあすく公そ中ら

ちすの花をいつまふん

うねとれと日まてあか

あ〜れ花よ人うちり

自
日姑乃風をさしひく限乃あ

と日にあす人あけ心を

長
うねる乃々まをみし方と風
れ花とふかれ上なるつらも終
あつたな果つていそまらぬ
と人々花とあけと也

まゝおそれ人れ恨いよわく
わくわく花よとてはまらん
かた風乃花あまもわあ人の
恨しあらしうは証をちりて見
てんとおつたの心也侍えとせ
おれとく恨あらしおとれ
そと人れおとれおとれ
おとれとく恨あらしおとれ
おとれとく恨あらしおとれ
おとれとく恨あらしおとれ

目れま人もあしちりしはるか
おとれとく恨あらしおとれ

さくさくちりおれ宿れ松風
おれ花乃さくさくちり人の
おれは松をれおとれ
さくさくちり

花りさくさくちりおれ
いとく風をさくさくちり
前白の無常乃向也竹の心
ちさくさくちりおれ
さくさくちり

陰うね尾よの松よ風吹く
ちさくさくちりおれ乃古寺

古寺乃落花乃夕や
長注サカ

山里花ちりそく人や
つとむかやちりりやえ

花乃色まわぬわとれぬけり
花れ色くそりやすに上よわぬち
打そくそくそりそりあやけぬよこ
つとくやまれくんとあふ

鶯鳥乃あつそつら庭にまき
さくくうらあつとむじふと

竹の葉くさあち風れきよ
あふれ雲よ花落れ音
け二句みゆるや

いほれ人そ公とつ

山に花よさすむ夕下音
そくのそとゆり袖乃家つと
花落り山いなそくは名あか
公とつくそくそく思ふれ
りやいてれゆむ

花の落る涙を家つとつと
よや音向ちくおく見ゆとい
もそり公けんさよ

花ハ根よちりは乃さ
極嘆き山く色れ
根よちりは乃さ
そらや

花ハ根よちりハ昔れ根す

こふくれ乃露もさしりくふさし

吹くふより色さかか松風

ちりんさんすいたりやうらん

ささりさし色に世さすけり

まうめ花はいつ色もあつ

まれ花のまわらうあつす世

いつきく恨とくす色にかん

しん色 長中三は句あつ花さす身をも
まの次三載

古くはうい小あは松

花ふらつ祐う山をれ未

たふい吉野をふうこまりて

花吹ちすさくくしり右里よ

極美しとすひいてさすゆ

しく井さ公あわしくあふいで

うへー花を家乃松風いあからわ
冬は橋よ風わきさそいでいれや

色くはら世甲さうに

橋花をさすいへいあありく

世甲れさゆさうく色とあらり

花とひ出す也

長周 私自注長位河てよと二十遊長野
多奇妙

うみゆくくやあんさうに

花のほなとぬ風乃よりらん

さうあれまや何よまてん

船露乃流わ風を流あて

連舟合乃付句也分別しくん

けり女心もあらんや

詞れつきはまのさうらな

気連平合乃句也

いさよて今恨人方りは

心さうら花乃山しせ

自 心あて心とほられさう花

う花あしよふやひさうと

長 心さうらや心さ友路定と

心さうら心とら色下略

長 云とい人れやあはは

花うう花何の心ああらん

自 家とややじ心と人さるあせ甲

よあわう色あ思りまてやし

人さあうとと色うりさうあれ

長 心さうら心とさうらう心也

花といさうら心也

山陰よとまあ心らうあはは

井ささう入月ああせよ

け平てんやけとあう

ぬさなととて風れあらん

心とらう心花うかほれ

自 ふうらうとと色うらう心風れ

長 心さうらう心この心也

心 心は後て花れ独らと恨らあや

心 心さうらあはは

心 心さうらあはは

心 心さうらあはは

心 心さうらあはは

心 心さうらあはは

心 心さうらあはは

朗々たる心もさびしき花石
あはれなるもやほろ花れたるは
い

おとろ蝶をさすに
おれおれとさす花とあはれ
こころと争ふは夕暮

力をあひこころ花を悟らん
花よせれおれはさあや

吹らさく風をさすは
のころ花よさあはれ

支向ふれおれ
前にはさすはさす
さすといふ

花よさあはれさあはれ
身よ心さすはさすは
さすはさすはさすは

ふり乃ち行水よ花をさす

けさささささささささ

ささささささささささ

けさささささささささ

あさささささささささ

ささささささささささ

若菜さささささささ

尺山りささささささ

けさささささささささ

ゆへにさささささささ

縁陰さささささささ

花のさささささささ

夷中人ささささささ

行水渾ききと西尺々行連舟
人必夏のそと心得るあらや

木く色極く紅く此里

風くやきせぬ庭よ花はく

樹陰乃落花れきりしゆりや

長注同

舟路のそと波のしづ

すしつう山花らるる良海

長
うらゆみ花れ波足ゆりんさか

かろく山と海とがすも花乃夏

を舟路のそとと也

あらしとけりし花と来じ

引
嵐ふ花乃波くく夕下言

ひのりりる夜くみれとれも色は

花乃波くくまれのそとと舟れ

舟也古と云くくくくくく公と

はなとく足踏く

花のかり表下照大方け舟れ舟

くや右里さくくくくくく粉

公とつを可ん舟

人よとくくくくくくく

花をみよらる涙とよ花公

け句別乃息と云くくくくく

うらみくゆりや

里をくくくくくくく

水なき色桃咲若れ舟ゆき

仙家乃公也桃尤いつとく仙境

よあり舟火吹華声流於紅桃

未詳

之浦驚凡振葉香分於紫桂之
林^也あきつと公とつら^也
仙家乃と西^也やあなを色桃咲
あきつ^也法々ふ^也

あきつ^也まよふ公の^也
あきつ^也つら^也あきつ^也

あきつ^也まよふ公の^也
あきつ^也つら^也あきつ^也

あきつ^也まよふ公の^也
あきつ^也つら^也あきつ^也

あきつ^也まよふ公の^也
あきつ^也つら^也あきつ^也

あきつ^也まよふ公の^也
あきつ^也つら^也あきつ^也

あきつ^也まよふ公の^也
あきつ^也つら^也あきつ^也

あきつ^也まよふ公の^也
あきつ^也つら^也あきつ^也

あきつ^也まよふ公の^也
あきつ^也つら^也あきつ^也

あきつ^也まよふ公の^也
あきつ^也つら^也あきつ^也

あきつ^也まよふ公の^也
あきつ^也つら^也あきつ^也

あきつ^也まよふ公の^也
あきつ^也つら^也あきつ^也

あきつ^也まよふ公の^也
あきつ^也つら^也あきつ^也

長 け二句亦及てゆくまへや

くく山様 来りまじり

あつさう八幡井 雑子と物言て

八景乃様 雑子いつまで之を

八景といひあややうなる景乃を

くくといひ也 来りまじりあつさう

夫といつたは かく山に八景乃

様 若く代よなともあり

長河同括也 未。くく一梓より

つるく百葉よりあり 梓乃八景乃

雑子乃くくといひ物言て 来りまじり

くくといひあややうなる景乃を

花を咲いつされぬ。言あん

籠よわら鳥れまの夜と

長 さいこしゆるのまかり

人を夢くくや夢ひきり

恒於一室と物言れやあり

前 常乃連平といつたは山くくといひ

と使あくは常乃内の言ひ付ゆ也

恒乃句の物言れまあり

くくの上より人を言へるや

とありと付和せり

長 胡蝶乃夢かきく是の人の言

くくといひと物言れまあり

くくといひと物言れまあり

月 夢をくく言れお河花を

くくといひと物言れまあり

くくといひと物言れまあり

長
とちあつていふた水との海や

これいささう水とあつて

自
桂をく月よおもひにぬえれく

自
これいささうとつらき月のか

長
深さぬいせしすかたなり

雨後の朧月桂乃を水乃邊

とすしつらや

おとさき一は乃山のかた

又や福むきつむいづる花

自
あつさう小恒乃山つすれと

あつてはもとよと云よ又やわんと

自
いり

梓乃小恒乃山つすれと

よじ法中いさや

何れいささういささういささう

自
恒乃山よとこれいささう

ありさういささういささう

いささうこれ花の月よあつて

自
蓬を来とくつら

長注同

ちとさういささういささう

山吹れいささういささう

自
さういささういささういささう

山吹乃花いささういささう

これいささういささういささう

あつさういささういささう

さういささういささういささう

りさういささういささう

山吹

長
芳野川より乃山吹道より
より乃梯もちりやよき人
山吹のつらなるものありて
うらぐら色の心れやみかた
但いゝあつゝむ

いまい乃恨いさ同よせん
そきさよふ花れかこの風流
花れあきありし恨も昔いかに
世あつゝそのつらさつゝ思ふよ
かこゝに昔のつらさつゝ思ふよ
とたはあつゝむ
長
人々乃秘れ古つら
橋咲とつら原乃長言

自
吾れ乃古の心也まは昔の心
人れとあふ心也まは原の昔の
あつゝつらさつゝ思ふよ
これつらとんまは古の心
つらつら心なり
長
吾れ乃古の心也まは昔の心
つらとん心也まは昔の心
つら乃皇居乃旧跡なり故
古乃心也まは原の昔の心
つら乃心也まは原の昔の心
芳野川あり

おりのしきり世中とらふは乃
茶の本とやなくはり

おれ茶本とやのちや世中とらふは
のちの老翁乃森とあり

子親行夕言よ月出と
前向乃ちきといつら夕言かハ

月の出たから午ふ茶は老を森
れ時高古もつらふを世といふと記はぬ

茶はれやい出よまむははき次
老翁乃ちりれは乃一ぬり

いふる鳥うぬよなくと
よおくれ月よつとさく部云

魚利付板乃法いさうをたをといふ

かへ鳥とと時高よいひるを付はせ
月よとむむ付高るる時付はせハ

いふる鳥とといふらぬれを
名乃高の嫌うたれと是のつら

まうと時高よいひるをたは
あつと乃高りのうとあち袖

ふ親とあまら月よまむと
茶乃森とけ高よぬとつら

あつとあまら月よまむと
あつとあまら月よまむと

あつとあまら月よまむと
あつとあまら月よまむと

あつとあまら月よまむと
あつとあまら月よまむと

茶の本とやなくはり

のあり橋とおとら一柱

自

くさくさすふ乃使をふやよ

自

残り橋といはれぬ、卯月乃半丸

自

とあり申乃酉と申人加多、此れ

自

使乃也、いかにありや、くさく

自

橋をくさくさくさくさくさくさく

自

いかにありや、くさくさく下略

自

卯月中乃酉加多のなれ使はる

自

なるといふ時乃な、十月中酉と

自

今よのありは、是乃記なり。

自

神山乃あり、末ハ世とけく

自

色ハ記の、卯月酉の、此御神也

自

記といふ、末乃世ハ、是也

自

白くきく、記ハ、是ハ、あかり

自

あ、い、や、神乃、心、ま、い、ん

自

日記と記、愛乃、う、よ、と、ま、り、甚、れ

自

ふ、ら、ん、守、付

自

神山乃、記、乃、奉、と、ま、り、つ

自

い、れ、と、わ、れ、う、う、う、う、う、あ、仲、言、い

自

甚、草、照、日、ハ、神、乃、め、と、ふ、か、き

自

さ、す、く、ふ、先、を、し、ら、ん、奉、ハ、日、よ

自

む、し、く、ま、さ、く、わ、れ、い、か、さ、て、い

自

神、事、も、近、つ、き、ハ、奉、ト、神、よ、ま、い、ん

自

云、心、也、お、白、れ、日、記、と、う、お、く、た、い、き

自

ク、な、あ、せ、り、日、記、ハ、甚、乃、う、と、や

自

神、山、れ、の、奉、と、下、略

自

冬、も、ま、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、の、記、あり

自

甚、れ、ハ、奉、乃、山、も、り、記、也

尺てれいゝるれこりりせれ
 ちやちや月れ盛れりりりり
 旬乃心天道名満乃理りりり
 行色ハニもりりれりりせりり
 照月乃後名りてりりりりり
 といつり心ととりあつりりり
 天道ハもりりりりりりりり
 皆けりりりりりりりりりり
 りりりりりりりりりりりり

外面乃標りりりりりり

水鶴なく庭れき水書文く
 月も本くく水も鶴ももりりり
 本くく水も水鶴の集りりりり
 標りりりりりりりりりりり

とあなりの袖りりりりりり
 系約水も水乃あつりりりり
 駒ハあなりの云と縁りりりり
 まて也あなりの云と景氣と
 いりりりりりりりりりりり
 ちのなりりりり

枕涼くも曇りりりり

水くく水も水乃あつりりり
 心いりりりりりりりりり
 二句又もりりりりりりりり
 めな草といりりりりりりり
 ちりりりりりりりりりりり
 河上ハ山田乃りりりりりり
 そまもりりりりりりりりり

中乃早苗と向乃公しゆりゆゑ
長
早苗未よあれあ〜と〜と
〜と〜と

去年より花を早〜又咲
橘乃よりい〜すきぬ新古く

自
旧誼（まゝりてり〜橘を花
志の〜アお笑〜りあられ信
とすきぬ新〜おと〜も也

長
去年より花を〜ら〜あ〜い
お〜又咲とち花新〜れ〜も〜

と〜き〜と〜ら花れ〜と
長
橘〜人れ〜し〜や〜あ〜ん

山ほ〜〜と〜は〜も〜あ〜は
油〜から〜花〜ら〜あ〜よ〜風〜

自
おつ〜油〜と〜人〜梅花と橘よ
と〜と〜〜と〜何乃〜ら〜は〜し
さ〜ら〜あ〜〜い〜ん〜向乃恨
は〜り〜〜と〜せ〜わ〜ら〜ん〜よ〜う〜り〜あ〜さ
じ〜は〜も〜お〜う〜と〜あ〜い〜〜業

よ〜いのせゆん
長
橘乃より〜何乃れ〜と〜あ〜ん
か〜き〜か〜〜

橘よ〜り〜き〜中〜あ〜れ〜信〜み〜く
橘乃より〜や〜り〜ら〜は〜い〜材
い〜や〜舟〜入〜庭〜也〜家〜よ〜ら〜あ〜す〜と〜信〜し
分〜し〜橘よ〜核〜古〜事〜信〜を〜信〜し
と〜く〜也

橘よ〜り〜き〜中〜あ〜れ〜信〜み〜く
橘乃より〜や〜り〜ら〜は〜い〜材
い〜や〜舟〜入〜庭〜也〜家〜よ〜ら〜あ〜す〜と〜信〜し
分〜し〜橘よ〜核〜古〜事〜信〜を〜信〜し
と〜く〜也

橘よ〜り〜き〜中〜あ〜れ〜信〜み〜く
橘乃より〜や〜り〜ら〜は〜い〜材
い〜や〜舟〜入〜庭〜也〜家〜よ〜ら〜あ〜す〜と〜信〜し
分〜し〜橘よ〜核〜古〜事〜信〜を〜信〜し
と〜く〜也

橘よ〜り〜き〜中〜あ〜れ〜信〜み〜く
橘乃より〜や〜り〜ら〜は〜い〜材
い〜や〜舟〜入〜庭〜也〜家〜よ〜ら〜あ〜す〜と〜信〜し
分〜し〜橘よ〜核〜古〜事〜信〜を〜信〜し
と〜く〜也

橘よ〜り〜き〜中〜あ〜れ〜信〜み〜く
橘乃より〜や〜り〜ら〜は〜い〜材
い〜や〜舟〜入〜庭〜也〜家〜よ〜ら〜あ〜す〜と〜信〜し
分〜し〜橘よ〜核〜古〜事〜信〜を〜信〜し
と〜く〜也

橘よ〜り〜き〜中〜あ〜れ〜信〜み〜く
橘乃より〜や〜り〜ら〜は〜い〜材
い〜や〜舟〜入〜庭〜也〜家〜よ〜ら〜あ〜す〜と〜信〜し
分〜し〜橘よ〜核〜古〜事〜信〜を〜信〜し
と〜く〜也

朽木の櫛材の電弁の存あり

入日新色ニきき電弁がよき

下家河一標さく高

多二き電弁をくや標乃後なる

さくみさくさくや

長 見しとららりや

心きく店れまて朽きり

六月毎の小田の電標なる

自 夏中乃志の電標乃茶いつさく朽

らん小田の川志の電標の

長 さくさくさくあり

六月毎の小田の店に注電標朽

らんや

小田の電標の電標の電標の

らんらんらん六月毎の店

らんらんらん六月毎の店

自 六月毎の山風秀句へ小野の

らんらんらん六月毎の山

らんらんらん六月毎の山

らんらんらん六月毎の山

長 小野の電標の山とらんらんらん

らんらんらん六月毎の山

らんらんらん六月毎の山

らんらんらん六月毎の山

らんらんらん六月毎の山

らんらんらん六月毎の山

らんらんらん六月毎の山

らんらんらん六月毎の山

とつて古今乃并ぬ公也 亦向じら
うきさゆやましくぬらういしす
白妙乃雪れん山と對してゆん
いとこれゆりてくさくせぬ

山れんうすくさたけぬ

夕れよ輝く指あやしく

夏れ雨はれ景もくや山をうく
かき輝乃くせそく

世れ二氣をくくわたり夏を
うすやんれまふとせしむ

野急れ色乃のたけをき

花より瓶乃夏をたけりわ色

白妙れや乃ん山と對する氣を
輝く指瓶乃夏をさくくさく

わねと書あつじら者也

野急れ色くくくくくくく

花より瓶のたけをき

よねらひけ眉をいひのたけを

夕れかかぬとく人れ宿

は春くやとの色をりぬれ眉

いとわとわといやけいりる

夕れよまゆとまゆ深成あまれ

拙をいひまゆあまをくすや

くみか眉をりる信人の悦い

いついりまゆいとまゆ悦れまゆと

まゆ有也夕れか眉を白くつ不

めら奈子け眉よゆりる

あつじらまゆとまゆとまゆ

長 夏とりの山に水音のいそ

松風さうりしる海にのち

夕立よ天津白雲のあはれ

自 高き乃夕立名残すこ中かき意深

と ちらし六月のさかきのみや

と ころしれ里乃梅のさけ

自 山見れい夕立さく風は

心ハ夕立さくさくさくさく

しりやえん雨はのこ山と梅は

夕よ海よりえやゆんけい

くく山よやけい

長 市乃夕立さくさくさく

天れ玉を山とさくさく

と 身也子林の葉氣さくさく

物々ハ波の松よ松の風

自 水乃上あや夏とさく

流よ松をさくさく納涼

長 流よ松をさくさく納涼

くく山よあはれ

長 彩あつさ西日さくさく

夏れ西日さくさく

く 彩色いあはれ

たとやうかりあはれ

自 彩さくさくさくさく

自 才云のさくさくさく

長 天よいあはれ

夏日者さくさくさく

らるなりりれ海いあはれ

宗中これ外るよとらたの葉と
中んゆり弄きわくつよまなり
^長宗中乃あるよとらたの葉乃
三々よとらたの葉乃

体こそ人れり地りこれ

^自桐の葉乃下よ凡持夕す

殊も格桐葉為時こそ人し

う地物よりゆれ夕の葉は涼よ

更よあつらゆりて清さちる

^長好しきや

付振とも公よあつら

うさゆりてととつら

体も格桐葉為時う地物や

おらて涼よやむりり

^自おらてゆりて涼よやむりり

うさゆりてととつら

をゆりてととつら

おらてゆりて涼よやむりり

うさゆりてととつら

をゆりてととつら

おらてゆりて涼よやむりり

うさゆりてととつら

をゆりてととつら

おらてゆりて涼よやむりり

うさゆりてととつら

をゆりてととつら

おらてゆりて涼よやむりり

うさゆりてととつら

月
いまだ行未と久しうん人の今
日れは後いとりやう記す
究の故乃い後川よさらさ
作んい神れおすんい
長
老後乃迷懐御後
うきり侍

天

